



・ **スペイン**

ビルバオ市における都市再生のチャレンジ

—グッゲンハイム美術館の陰に隠された都市基盤整備事業—

吉本光宏

ビルバオ市における都市再生のチャレンジ

ーグッゲンハイム美術館の陰に隠された都市基盤整備事業ー

はじめに

1997年に開館したグッゲンハイム美術館の成功で、ビルバオ市は世界各地の創造都市プロジェクトの中でも、最も成功した事例として一躍有名になった。実際、今回参加したアムステルダムでの国際会議「Creativity and the City」でも、『To B or not to B』というセッションが設けられたが、このBはビルバオのことを指している。

しかし、グッゲンハイム美術館は、近年、バスク州、ビスカヤ県、ビルバオ市などが共同で取り組んできた都市再生プロジェクトの一要素に過ぎず、実際には、美術館建設と並行して、官民共同で数々のプロジェクトが同時並行的に推進されている。それは、「Creative City」のコンセプトに基づいた都市再生というだけでなく、むしろ、地域の都市基盤全体を再整備し、産業や経済を活性化させる取り組みである。

本報告書では、ビルバオ市でのインタビュー調査や現地視察、ならびに調査過程で入手した資料や帰国後のインターネット検索で得られた情報などに基づいて、ビルバオ都市再生プロジェクトの背景や経済効果、都市再生プロジェクトの全体像、グッゲンハイム美術館の概要を紹介するとともに、調査で明らかになったプロジェクトの推進体制や開発手法についても、その概要を整理した。

目 次

1. 都市再生プロジェクトの背景と経済効果	4
(1) バスク州の地域計画	4
(2) 都市再生プロジェクトによるバスク州の経済成長	5
(3) ビスカヤ県とビルバオ市の地域特性	5
2. 都市再生プロジェクトの全体像	7
(1) ビルバオ大都市圏活性化戦略プラン	8
(2) 港湾・交通インフラの整備	8
(3) ネルビオン・アベニュー：ビルバオの中心都市軸	10
(4) 中心市街地アバンドイバラ（Abandoibarra）地区の再開発	10
(5) 文化施設	11
(6) その他の施設	12
3. グッゲンハイム美術館	14
(1) グッゲンハイム美術館の国際戦略とビルバオ	14
(2) ビルバオ・グッゲンハイム美術館の概要	14
4. 都市再生プロジェクトの推進体制	22
(1) ビルバオ・メトロポリ30（Bilbao Metropoli-30）	22
(2) ビルバオ・リア2000（Bilbao Ria 2000）	24
5. ビルバオ都市再生プロジェクトに関する考察	27

1. 都市再生プロジェクトの背景と経済効果

まず、ビルバオ市の都市再生プロジェクトの背景となったバスク自治州（以後バスク州）全体の計画の概要を整理し、その経済波及効果について紹介したい¹。

(1) バスク州の地域計画

① スペインの地方分権制度とバスク州

スペインでは、1978年の憲法改正によって、中央集権から地方分権へ移行し、政治権力と諸機能が自治州に委譲され、地域整備や都市計画の権限も地方に委ねられるようになった。その結果、ビルバオのような都市再生プロジェクトに中央政府が関与することはない。

したがって、バスク州政府には、縦割り分野別の政策を横断的に調整し、県や市町村の計画を指導し、地域整備のための新たな手法を考案する権限がある。こうした制度を背景として、州を構成する自治体が相互連携のもとで、州という広域レベルで都市計画の諸課題に取り組むことが可能となっている。

バスク州の人口は約200万人で3つの県があり、それぞれビルバオ、サン・セバスチャン、ピクトリアという州内の三大都市が県都となっている。州内には250の市町村があるが、州政府の財政力が強いいため、地域開発プロジェクトは州政府の主導で進められることが多い。さらに州政府の方針と市町村の計画のすり合わせをおこなうために、州内を15のエリアに分割し、州全体の地域戦略が推進されている。

ちなみに、サン・セバスチャンの都市圏の人口は約30万人で、5つの自治体からなっており、都市型観光に力を入れている。ピクトリアは人口約20万人でバスク州の政治的な首都であり、環境計画で先進的な取り組みが行われている（ビルバオ都市圏については後述）。

② バスク都市圏（シティ・リージョン）

2000年に州の地域計画大臣とサン・セバスチャン市長、ビルバオ市長、ピクトリア市長との間で協力条約が結ばれ、「都市圏（City Region）」という考え方に基づいて、三県都と州の都市戦略を相互調整できるようになった。

この都市圏の考え方は、ヨーロッパにおけるバスク州の位置づけに関する考察に基づいて策定されたもので、三県都をあたかもひとつの都市であるようにみなし、それらをグローバル都市「エウスカディ」と呼んでいる²。ここでいうグローバル化には、「国際レベルで重要な役割を担う」ということと、「バスクの三つの県都をひとつの都市圏として統合しよう」というねらいが込められている。

この三都市を結ぶ「バスクY線」と呼ばれる高速鉄道の計画が確定し、それはパリからマドリッド間の高速鉄道の一部に組み込まれることになっている。この鉄道が完成すれば、三都市はそれぞれ30分程度で移動が可能となり、まさしくひとつの都市圏として機能できるようになる。

1 バスクとは厳密には、スペイン側のビスカヤ県、ギプスコア県、アラバ県、ナバラ県に加えフランス側のピレネー・アトランティック県（バスク地方とペアルン地方を含む）の一部で、ラブルディ、低ナバラ、スベロアの三地方を合わせた地域をさす。歴史上、実際にはバスクという領域の「国」は存在していない。本稿では、Basque Countryをバスク州、Regional Council of Bizkaiaをビスカヤ県、Bilbao Regional（Town）Councilをビルバオ市と訳した。

2 Euskadhi。バスク語で「バスク」のこと。

(2) 都市再生プロジェクトによるバスク州の経済成長

ビスカヤ県の経済の隆盛は、19世紀半ばの産業革命によってもたらされた。当時、起業家スピリットに基づいて、鉱業、鉄鋼、金融、保険、商業などの分野で数多くの民間企業が設立された。その時代の産業は現代まで引き継がれているが、近年では、環境ビジネスや情報、通信、技術開発など、いわゆるニュー・エコノミーと呼ばれる分野の進展が著しく、新しい雇用もそれらの分野で生み出されている。

その結果、90年代以降、バスク州はめざましい経済成長をとげることとなった。1991年から2000年にかけてバスク州のGDPの伸びは、平均で3.5%と、スペイン全体の2.6%、EUの1.8%に比べて高い成長率を達成している。とりわけ、97年には4.0%、以後、98年5.1%、99年5.2%、2000年5.3%と極めて高い成長率を記録し、2000年から03年にかけても、平均で3.5%の成長を維持している。一人あたりGDPも1999年以降、EUの平均を上回る水準となっている。

また、80年代には16.2%だった失業率は、90年代に14万3,000人の新しい雇用が創出されて、12.4%（1991-2000年の平均）まで低下し、2002年の最初の3ヶ月では、EUの平均と同じ水準の7.6%まで低下している。

ビスカヤ県、正確にはネルピオン川沿いに広がる地域は、2001年から04年にかけて、44万m²の敷地に、金額にして1億4,000万ユーロの投資を受け入れる予定である。左岸のビジネス開発の中心地域は、2001年から03年にかけて、この地域で61の企業の創業を推進し、直接雇用で329人、間接雇用で987人の雇用を創出する見込みである。

バスク州の公的セクターが、95年から98年にかけて環境政策や環境事業に投資した金額は、約20億ユーロで、その結果7万6,000人以上の雇用が創出され、バスク地方の経済波及効果は50億ユーロにも達している。

(3) ビスカヤ県とビルバオ市の地域特性

① ビスカヤ県およびビルバオ市の概要と都市再生プロジェクトの背景

ビスカヤ県の面積は2,221km²で111の市町村によって構成されている。ビルバオ市はビスカヤ県の県都で、行政区域内の人口は約40万人。25の市町村に広がる都市圏の人口は約100万人で、バスク州の人口200万人の50%が集中している。

人口で見ると、ビルバオは、スペイン国内では、マドリッド、バルセロナ、バレンシア、セビリアに次いで5番目の大都市圏である。ヨーロッパ全体で見れば、36番目に位置し、ダブリンやリバプール、フィレンチェなどと同じ人口規模を有している。

1960年代から70年代にはバスク州全体が重工業によってめざましい発展を遂げ、ビルバオはその中心的な存在であったが、70年代後半から80年代にかけて、伝統的な工業都市としての産業基盤が急速に衰退していた。

また、ビルバオ都市圏はネルピオン川の両岸に広がっているが、川の両岸では地域特性に大きな差があった。すなわち、右岸はバスク社会と深く関わる高所得者層が住んでいたのに対し、左岸には重工業が定着して1960～70年代に職を探して移住してきた低所得者層が暮らしていた。港湾施設が川に沿ってビルバオ

の中心部まで延びていたため、船の運航の都合上、右岸と左岸を結びつける橋の建設が進まず、両地域は長い間分断されていた。

ビルバオ市で展開されている都市再生プロジェクトは、その衰退した地域経済を活性化させるために構想されたもので、行政だけではなく民間の力も結集する形で実現している。また、その中核となったビルバオ市の外港設備の拡張計画は、都市中心部の港湾設備を撤去・移転して再生を図るために実施されたものである。

② ビスカヤ県の行政機構

ビスカヤ県の自治機構は、県議会と公務執行機関である地域評議会の二つの組織によって支えられている。県議会には、道路、公共事業、農業、林業、社会福祉、古文所、博物館、財務、税制など、幅広い立法権が与えられている。

上位機構としてバスク州議会とバスク州政府があり、バスク州政府は、ビスカヤ県の各部署や代表議員を通して、憲法とバスク州法によって付与された法的権限を執行している。また、ビスカヤ県内の111の市町村には、それぞれの固有の課題に対処する市町村評議会が設けられている。

これら自治体間の責任や権限の分配は、通常、歴史的圏域法（Historical Territory Act）と呼ばれる法律に基づいて行われている。

③ ビスカヤ県の財政システム

ビスカヤ歴史地域は、独自の政治的、財政的なシステムを有しており、独自に税を決定し徴収することができる。スペイン国内には17の州があるが、バスク州とナバラ州は特権制度下であり、共通制度下にある他の15の州とは、財政制度が大きく異なっている。バスク州の特権県3県とナバラ特権州（1州1県のため徴税権は自治州に帰属）は、税金の大部分の管理等を認められており、それぞれの歳出を賄うために中央政府から移転支出を受けていない。逆に、国防や外交政策などに関する共通経費を分担金という形で国に支払っている。

この分担金はクボ（Cupo）と呼ばれており、ちなみにビスカヤ県の2002年度の分担金は5億240万ユーロで、総収入45億850万ユーロの11.1%となっている。

こうした財政的な自治権は、自治制度の基本要件のひとつであるが、そのことによって、ビスカヤ県の既存企業や新たな進出企業に対する支援制度やインセンティブを制定できるとともに、所得税や事業所税などの直接税に関する立法権を可能にしている。

また、このシステムによって、税収を生産的な経済活動や雇用の創出を生み出す施策に使うことができ、開放的で流動的な市場の中での競争力のある企業集積の提案が可能となっている。

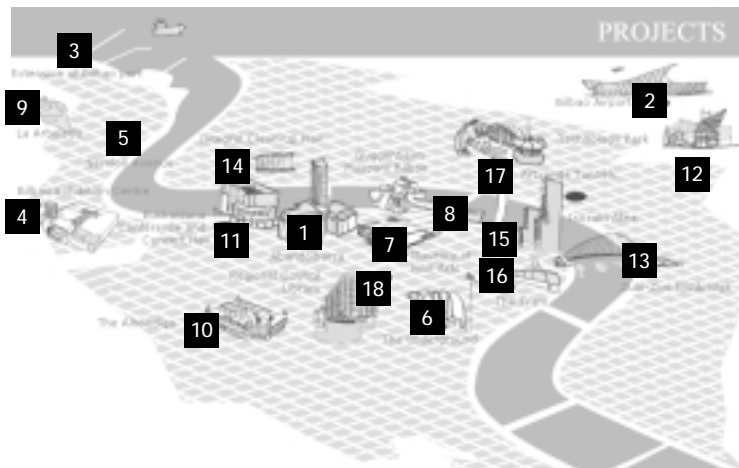
1990年にビスカヤ県評議会は国際的な格付け機関に財政状況の評価を依頼したが、S&P社が長期AA、短期A1+、ムーディーズが長期AA2、短期P1と水準の高い評価をし、現在までその水準を維持している。

2. 都市再生プロジェクトの全体像

グッゲンハイム美術館は、バスク州政府が実施する15億USドル³という総合的な再開発プロジェクトの一環として実現したものである。それらのプロジェクトの中には、世界的に著名な建築家が携わったものも多く含まれているが、州政府の発行する資料やホームページには以下に列記した18件のプロジェクト（アルファベット順に記載、括弧内は事業主体 - 把握できたもののみ）が紹介されており、グッゲンハイム美術館以外にも、港湾、道路、地下鉄等の都市インフラの整備、大規模地域開発、文化施設の建設・リニューアル、港湾の再整備、その他都市施設の建設など、その内容は非常に多岐にわたっている。

ここではまず、1989年に策定されたビルバオ大都市圏活性化戦略プランの概要を整理した上で、グッゲンハイム美術館（第3節で詳述）以外の都市再生プロジェクトについて、その概要を整理した。

図表-1 ビルバオ市都市再生プロジェクトのサイトマップ



- 1 Abandoibarra : アバンドイバラ地区再開発 (Bilbao RIA 2000)
- 2 Bilbao Airport : 新空港の建設 (Aena, Aeropuertos Españoles y Navegación Aérea)
- 3 Extension of the Port : 港湾拡張計画 (ビルバオ港湾局)
- 4 Bilbao Exhibition Centre : ビルバオ展示場 (ビルバオ展示場)
- 5 The River Estuary : ネルピオン川河口広域開発計画 (ビスカヤ県)
- 6 Metro Bilbao : ビルバオ地下鉄 (ビルバオ地下鉄公社)
- 7 Museum of Fine Arts : 美術館の改修・拡張計画 (ビルバオ美術館)
- 8 Guggenheim Museum Bilbao : ビルバオ・グッゲンハイム美術館 (ビルバオ・グッゲンハイム美術館、建設工事費はバスク州)
- 9 La Arboleda : アルボレダ自然公園、Meatzegiゴルフ場 (ビスカヤ県)

3 Guggenheim Museum Bilbao提供資料に基づく数字

- 10 La Alhóndiga : アルホンディガ文化スポーツセンター (ビルバオ市)
- 11 Euskalduna Congress Centre : エウスカルドゥーナ国際会議場・コンサートホール (ビスカヤ県)
- 12 Technology Park : テクノパーク (テクノパーク)
- 13 Zubi-Zuri Footbridge : ズビズリ歩道橋 (ビルバオ市)
- 14 Integral Clean-Up Plan : ネルピオン川浄化計画 (バスク州、ビルバオ・ビスカヤ水道局)
- 15 Isozaki Atea : 磯崎ゲート (ビルバオ市)
- 16 The Tram : 路面電車 (Eusko Tren、Eusko Jauriaritza、Bilbao Ria 2000、ビルバオ市)
- 17 Artxanda Tunnels : アルザンダ・トンネル (ビスカヤ県、アルザンダ・トンネル公社)
- 18 Regional Council Library : ビルバオ図書館 (ビスカヤ県)

(1) ビルバオ大都市圏活性化戦略プラン

ビルバオ大都市圏の戦略的計画は、バスク州政府とビスカヤ県の求めに応じて、1989年に創設されたビルバオ大都市圏活性化戦略プランの中で作成された。戦略プランでは、21世紀のビルバオ大都市圏では、次の7の基本的な性格を開発の基本方針とすることが示されている。すなわち、開放的 (open)、多様性 (plural)、統合的 (integrated)、近代的 (modern)、創造的 (creative)、社会的 (social)、そして文化的 (cultural) の7つである。

そして、活性化プランは、ビルバオ大都市圏の再活性化に向けた取り組みを集約するために、次の8つの主要課題を設定している。

- ・人材育成 (Investment in Human Resources)
- ・近代工業地域におけるサービス産業都市の形成 (Service Metropolis in a Modern Industrial Region)
- ・移動性とアクセスのしやすさの確保 (Mobility and Accessibility)
- ・環境の再生 (Environmental Regeneration)
- ・都市空間の再生 (Urban Regeneration)
- ・文化的な中心性の創出 (Cultural Centrality)
- ・公的な行政機関と民間セクターによる共同マネジメント (Coordinated Management by the Public Administration and Private Sector)
- ・社会的な活動 (Social Action)

(2) 港湾・交通インフラの整備

① ビルバオ港の拡張計画

この計画は、港湾エリアをそれまでの倍の大きさに拡張し、欧州地域でもビルバオ港を競争力のある主要な港湾都市にすることを目的に実施された。

本計画では5平方キロメートルの防波堤付きドックを建設予定で、完成すれば、さらに8キロメートルの港湾建設、350ヘクタールの埋め立てが可能となる。環境への影響は最小限に抑えられ、1991年に着工された本計画は二期に別れており、第一期計画は98年12月に完了している。

この港湾拡張計画は、旧港湾施設より下流域に立地しているため、完成すれば、ネルビオン川沿いの旧港湾施設の解体がさらに促進されることとなり、都心部でより積極的な都市再生プロジェクトが可能となる。

第一期計画の総工費は2億5,460万ユーロ、そのうち1億5,026万ユーロは港湾局の自己財源であった。それ以外の財源は、まず、欧州地域開発基金（European Regional Development Fund）からの補助金3,763万ユーロによって賄われた。さらに、港湾局は、欧州投資銀行（European Investment Bank）や数多くの民間企業と融資契約を結んで、6,011万ユーロの借り入れを行っている。

② ネルビオン川浄化計画

この計画は、バスク州の環境整備プロジェクトの中でも最も重要なものである。その目的は、ビルバオ大都市圏の100万人の居住者のニーズに応じて、ネルビオン川河口部の汚泥を集め、浄化した上で、自然環境に復帰させるというものである。本プロジェクトの建設・土木工事の総支出額は、6億102万ユーロ。

③ 新ビルバオ空港

新ビルバオ空港はビルバオの中心部から9 kmの位置に立地しており、管制塔は1996年に、ターミナルは2000年末に完成している。ターミナルビルは年間300万人の利用が見込まれているが、その立地からスペインだけではなくポルトガルからの利用も見込まれ、年間利用者1,000万人のキャパシティを有している。

新空港は、バレンシア州の建築家、サンティアゴ・カルトラーバの設計で、翼を広げたようなユニークなデザインとなっている。

④ アルザンダ（Artxanda）・トンネルと高速道路網

2002年5月に開通したアルザンダの3本のトンネルは、ビルバオ大都市圏の道路交通網整備の重要なプロジェクトで、ビルバオの中心部と新空港、新バイパスを結んでいる。ちなみに、ビルバオ大都市圏では、複数のバイパス道路を含め、高速道路網の整備が推進されている。

⑤ ビルバオ地下鉄網

ビルバオの地下鉄網は、土木工学、建築デザイン、公共交通機関という三者の協力によって実現した。1988年初頭、この地下鉄計画を最初に構想したのは、バスク州の交通局で、駅舎とアプローチのデザインはノーマン・フォスターに委嘱された。

ガラス張りのエントランスは、デザインしたノーマン・フォスターに敬意を表して、「fosterites」と呼ばれているが、ビルバオの都市景観に近代的な雰囲気を生み出している。地下鉄は一部が1995年に開通し、土曜日には終夜営業が行われている。

ビルバオ市の40万人を含め、ビルバオ大都市圏の100万人がこの地下鉄の利用対象者として想定されて

いる。ルートはY字型で、ネルピオン川兩岸の2本（Plentzia発、Santurtzi発）のラインが1本（San Inazio - Basarui間、11.5km）に統合される計画（総延長45km）。1号線はPlentziaからBasauriまでの28.2kmで、PlentziaからBoluetaまでが現在運行中。2号線はSanturtziからBasaruiまでの21kmで、ネルピオン川の左河岸を運行予定だが、着工は延期されている。

ちなみに年間利用者数は1997年が約4,150万人で2002年は約5,590万人。建設費は1号線が6億102万ユーロ、2号線が6億5,550万ユーロで（合計12億5,600万ユーロ）、2011年に全線が完成予定である。

⑥ ビルバオ路面電車

ビルバオ路面電車は、公共交通網の一環として整備されたもので、最初の区間は2002年12月に開通している。この計画は、川沿いの交通量と環境汚染を削減するために最もふさわしい交通機関として構想されたものである。第一期分は5 kmの間に12の停車場が設置され、グッゲンハイム美術館など市の主要部分を運行するルートで、観光客の利用も見込まれている。5分から15分間隔の運行で、ウィークデイは約10,000人が利用しているが、最終的には2万6,000人から3万3,000人の利用が見込まれている。

EuskoTranと名付けられたこの路面電車の投資額は、5,100万ユーロ。路面電車は50年前に一度撤去されているが、この新設によって、スペイン国内ではバルセロナに次いで、路面電車の整備された2番目の都市となった。

(3) ネルピオン・アベニュー：ビルバオの中心都市軸

ネルピオン川の河口左岸の工業地帯は、15年間の歳月と2億4,000万ユーロの費用を要する開発プロジェクトによって、近代的で機能的な偉大な都市軸（大通り）に生まれ変わる予定である。それは、ビスカヤ県の県都のネルピオン河口域の都市開発にとって大きな障害となっている河岸の再生を意味している。

この計画は、1994年のビルバオの部分的な地域開発の改定案の中で初めて策定されたもので、建築的には5期に分けて実施される。本プロジェクトによって、地域を貫く大通り、簡易鉄道、自転車レーン、歩行者道、ビルバオ国際展示場、住宅、サービス用道路、橋、レジャー・レクリエーション地域、等々が整備され、ビルバオからエル・アブラ港間の河口の左岸に新しい都市空間が生まれ出される予定である。

(4) 中心市街地アバンドイバラ（Abandoibarra）地区の再開発

アバンドイバラ地区の再開発は、ビルバオ大都市圏の都市再生の推進機構であるビルバオ・リア2000（組織の詳細は後述）の手がけた最も象徴的なプロジェクトである。都市の中心部に立地するこの地区は、約35万m²の広さを有しており、最近まで港湾施設やコンテナ用の鉄道駅、造船所が立地していた場所である。

シーザー・ペリのマスタープランに基づいて、アバンドイバラは、レジャーやビジネス、文化、住宅地、緑地、河岸などが整備される予定であるが、それは以前のように都市空間を分断するバリアではなく、都

市全体の屋台骨として機能するものである。当該地は、市の二つの重要なランドマークであるグッゲンハイム美術館とエウスカルドゥーナ国際会議場・コンサートホール間に位置し、ネルピオン川の河口に面して広がっている。建設が計画されている施設は次のとおりで、この開発によって、美術館とコンサートホールは来年の秋にはリベラ公園によって結びつけられることになっている。

- ・31階建ての市庁舎（Regional Council s Tower、シーザー・ペリのデザイン、床面積8万3,000m²）
- ・オフィスビル（7万4,000m²）
- ・住宅（800戸、Luis Pea Ganchequiのデザインした第一期は既に着工済み）
- ・シェラトンホテル（メキシコの建築家Ricardo Legorretta設計）
- ・ショッピング&レジャーセンター（ロバート・スターンの設計、着工済み）
- ・バスク州立大学講堂
- ・Deusto大学の図書館
- ・公園、緑地、歩道橋（敷地全体の約3分の2に相当する約2万m²が公園や緑地に提供される予定）

（5）文化施設

ビルバオの都市再生プロジェクトを一躍有名にしたのは、1997年に開館したグッゲンハイム美術館（詳しくは後述）であるが、それ以外にも、国際会議場とコンサートホールからなる大型複合文化施設が建設され、また、近代美術館もリニューアルによって拡張されている。

① エウスカルドゥーナ（EUSKALDUNA）・ホール

エウスカルドゥーナ国際会議場・コンサートホールは、1999年2月に開館。ネルピオン川沿いの、グッゲンハイム美術館の下流方向に立地しているが、以前この敷地はエウスカルドゥーナ造船の立地していた歴史的な場所で、当時の遺構が部分的に残されている。スペイン人建築家のマリア・ドロレス・パラシオス（Maria Dolores Palacios）とフェデリコ・ソリアノ（Federico Soriano）によって設計された建物は、旧エウスカルドゥーナ造船所で最後に建造された船をモチーフにしており、5万3,000m²の床面積を持つ巨大な多目的の複合文化施設である。

この施設は、大劇場・コンサートホール（2,165席、スペイン国内では最も広いステージを有する3面舞台、72ストップのパイプオルガン）、劇場（613席）、多数の会議室、VIP用会議室、展示室、レストランなどから構成されており、オペラ公演、オーケストラ演奏会、バレエ公演などの他、大規模な会議や各種集会、コンベンション、企業ミーティングなどにも対応可能である。

また、ビルバオ交響楽団とビルバオオペラ愛好会が、ここを本拠地としており、開館初年度は481件のイベントが開催され、そのうち192件が芸術的な催し、40件が大規模会議で、稼働率は86%であった。

② ビルバオ近代美術館

この美術館は、1908年に創設され、後に近代美術館と統合されたもので、スペインやフランドル、オランダなどの15世紀から17世紀の絵画を中心に、バスク地方や国際的な現代美術を含め、約6,000点のコレクションを保有している。

美術館は、改修、拡張工事が行われ、2001年11月にリニューアルオープンした。美術館の面積は6,500m²に拡張されるとともに、エントランスやパブリックスペースも拡充された。工事に要した費用は1,330万ユーロで、バスク州政府、ビスカヤ県、ビルバオ市が財源を手当てした。

③ アルホンディガ (Alhóndiga) 文化スポーツセンター

建築家リカルド・バステダ (Ricardo Bastida) のデザインによって1909年に建設されたLa Alhóndigaは1977までワイン倉庫として使用されていた。それはビルバオの最も象徴的な建物のひとつで、改修工事によって、文化とスポーツの複合施設に生まれ変わる予定である。具体的には、屋上プールのあるスポーツ・コンプレクスとメディア図書館 (図書、ビデオ、音楽) 展示スペース、多目的ホール (500席) などが整備される。

さらに、施設の中にはカフェやレストラン、店舗、700台収容の地下駐車場なども整備される計画で、ビルバオ市民の出会いや交流の場となるばかりか、大都市圏の情報交換の拠点ともなることが期待されている。

改修工事には4年の歳月と、4,200万ユーロの費用が見込まれており、2005年に完成の予定である。

④ ビルバオ図書館

ビスカヤ県で最も古い図書館を21世紀のニーズに対応させるため、ビルバオ市 (地域評議会) 図書館を改装・拡張する計画。最近のビルバオの都市環境に合わせて、伝統的なスタイルと最も現代的なスタイルを結合させたようなデザインになる予定である。

計画では、古い建物を改修すると共に、地下駐車場と二つの新しいビルが建設される。三つの建物は、内部通路の形をした光庭の回りを取り囲むように配置され、ガラスや石などの素材を用いることによって全体のデザインは軽いイメージの魅力的なものになる予定である。

(6) その他の施設

① 磯崎ゲート : ウリビタルテ地区再開発

このプロジェクトは、ウリビタルテ (Uribitarte) 地区のために、建築家磯崎新によってデザインされたもので (開発計画に建築家の名前が付けられている) 地区内の深刻な問題が解決される予定である。つまり、ひとつには、14mの段差のある地形を改善し、もうひとつには、倒壊しそうな税関仮置き場に占拠された空間を再活用しようというものである。

敷地面積は4万1,466m²で、22階建て高さ82mのクリスタル状のツインタワーがビルバオ新市街地へのゲートのように建設される。タワーの高層部分は110m²のマンションが各階に4戸ずつ設けられ、低層部には物

飯店やシニア・センター、半地下部分にはハードロックカフェのようなカフェ・レストランが設けられる。その他にも5棟の建物が建設され、市の施設や映画館、レストラン、住宅、駐車場などが設けられる予定。

② スビズリ（Zubi-Zuri）歩道橋

設計者のサンティアゴ・カラトラバをたたえてカラトラバ橋とも呼ばれるこの歩道橋は、97年に開通し、ネルピオン川の兩岸をつないでいる。Zubi-Zuriはバスク語で白い橋を意味しており、特徴的なデザインによってビルバオの象徴的な建造物のひとつとなっている。

白い鉄とガラスを使った円弧を描くような美しい橋は、磯崎新の設計するウルビタルテ複合開発へのアクセスとなり、グッゲンハイム美術館などへ続くプロムナードにつながっている。

③ ビルバオ展示場

需要の増大や施設の老朽化、立地条件の改善に対応するため、現在のビルバオ国際展示場は移転の必要性に迫られている。約12万㎡の展示面積を持つ新しいセンターの建物とサービスによって、投資の飛躍的な増大と、多数の雇用創出が期待されている。

④ ザウムディオ（Zaumudio）テクノパーク

ザムディオ・テクノパークはビルバオから10kmに位置し、120haの広さを有している。最先端の技術を有する企業が開発拠点を整備できるようにデザインされ、重要なインフラと先進的なサービスが供給されている。その主な目的は、ビスカヤ県全体の技術的な能力を増大させるために、研究・研修センターと企業間のコミュニケーションを促進させることである。

⑤ アルボレダ（Arboleda）自然公園

この古い露天の鉄鉱山は、ビスカヤ県の経済開発と工業開発にとってはなくてはならない存在だったが、まもなく自然公園として生まれ変わり、様々なレジャー用、スポーツ用のエリアを合体させた地区となる。この地区は三つの町村にまたがっているが、開発を促進するために、Meatzegiという公共機関が設立された。

地区内には、バレステロス（Severiano Ballesteros）によってデザインされた公共のゴルフコース、この新しい自然とレクリエーションセンターの誕生を祝う鉱山のテーマパーク、それらを取り囲む公園、レジャー施設、ホテルなどが整備される予定である。

3. グッゲンハイム美術館

ビルバオ市の都市再生プロジェクトの象徴は、何と云っても1997年10月に開館したグッゲンハイム美術館であろう。以下に美術館の施設や運営、事業などの概要と、開館後5年間の実績や経済波及効果について整理した。

(1) グッゲンハイム美術館の国際戦略とビルバオ

グッゲンハイム美術館は、ニューヨークに、フランク・ロイド・ライトの建築で有名な本館を持つ美術館である。正式名称はソロモン・R・グッゲンハイム美術館、運営は同名の財団で、1939年に自動車ショールームを改装して、グッゲンハイムのコレクションを公開したのが美術館の始まりである。

その後、何度かの移転を経て、59年にライト設計の本館が開館して以降、しばらく本館のみの運営であったが、88年に現館長のトーマス・クレンズが就任してから、多館戦略、国際戦略を推し進めるようになった。

1976年にはグッゲンハイムの姪のベギーがベニスの自宅の一部でコレクションを公開していたが、クレンズは90年に本格的な美術館に改装してオープンさせ、92年にはニューヨークでも磯崎新の設計でソーホーの分館をオープンさせている（ただし2001年に閉館）。その後もビルバオ、ベルリン、ラスベガスとグッゲンハイム美術館をオープンさせ、現在は南米リオデジャネイロでの計画（ジャン・ヌーベル設計）が進行中である。

ビルバオでのグッゲンハイム美術館は、実は、こうしたグッゲンハイム美術館自体のグローバル戦略とリンクする形で実現した。具体的には、1991年2月にバスク州政府の高官がグッゲンハイム財団にビルバオ市の再開発への参加を要請したのがきっかけである。当時グッゲンハイム財団の理事会は、「世界各国で拠点作りに取り組むことで、調和した世界的な美術館グループを創造する」という長期計画をちょうど採択したところだった。財団は提案を受け入れ、数ヶ月の交渉の末、91年末にグッゲンハイム・ビルバオ美術館の開発とプログラム提供に関する基本合意が結ばれた。

(2) ビルバオ・グッゲンハイム美術館の概要

① 建築計画と運営の概要

炎が舞い上がったようなユニークな形状を持つチタニウム製の外観で有名なデザインは、アメリカ人建築家フランク・ゲーリーの設計である。彼他に、磯崎新とオーストリアのクーブ・ヒメルブロイ（Coop Himmelblau）の3名がコンペに参加、バスク州政府とグッゲンハイム財団の担当者による審査でゲーリーの案が採択された。総工費は1億ドルで、ユニークなフォルムのデザインには航空工学で用いられているCATIAというソフトウェアが用いられている。

ビルバオ・グッゲンハイム美術館の建設費は、すべてバスク州政府が負担し、美術館はバスク州政府の所有となっている。運営主体は、バスク州政府とソロモン・R・グッゲンハイム財団の設立したビルバ

オ・グッゲンハイム美術館財団で、バスク州政府は、毎年、美術館の運営予算に補助金を支出している。グッゲンハイム財団は、主要なコレクションやプログラムに加え、企画と運営の専門的なノウハウを提供することによって、美術館の運営を行っている。



*グッゲンハイム・ビルバオ美術館の全景。犬のオブジェは Jeff Coonsの作品「Puppy」, 1992

美術館の規模や施設構成は以下のとおり。

- ・敷地面積：32,700m²
- ・建築面積：28,000m²
- ・延床面積：24,000m²
- ・展示スペース：10,560m²（20室）
- ・パブリックスペース：2,500m²
- ・その他の施設：図書館（200m²）、劇場（350席、605m²）、オフィス（1,200m²）、ミュージアムストア（375m²）、レストラン・カフェ（610m²）

② プログラムと運営モデル

美術館のプログラムは、まず、ニューヨーク、ベニス、ベルリン、そしてビルバオのグッゲンハイム美術館のコレクションの展覧会がベースになっている。それらに加え、グッゲンハイム美術館と提携関係にあるサンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館、ウィーンのアート史美術館のコレクションから出品されたり、現代美術をはじめとした大がかりな巡回企画展が開催されている。

また、美術館は次の3つの運営モデルを統合する形で運営されている。

- ・百科辞典的な運営モデル：ほとんどの美術館に一般的な方法で、歴史的なアプローチから美術作品を年代順に展示する
- ・展示空間に合わせたインスタレーション・モデル：展示空間に合わせて特定のアーティストに作品の制作を依頼して展示する
- ・特定のアーティストを追求するモデル：特定のアーティストに焦点を当て、作品に関する詳細な研究に基づいて展示する、回顧展的な展示、あるいは特徴的な期間を分析するような展示のどちらか

③ 展覧会と入場者数

1997年から2002年までの5年間に開催された展覧会数は次のとおり。

- ・コレクション展：26
- ・企画展：21（うち回顧展：8、大規模歴史展：5、テーマ展：8）

2000年に一日の入場者数が3,000人を超えた展覧会は、世界で27件で、そのうちの7件がビルバオ・グッゲンハイム美術館の展覧会で占められている。同様に2001年では20件のうち3件がこの美術館のものであり、ビルバオのグッゲンハイム美術館が、国際的に見てもいかに多くの観客を集めているかがわかる。

図表-2 Top exhibitions 2000

	一日当 入場者数	展覧会名	美術館名	開催都市名
1	6,843	El Greco: Identity & transformation	National Gallery	Athens
2	5,876	Earthly Art - Heavenly Beauty	State Hermitage	St Petersburg
3	5,495	Sinai: Byzantium, Russia	State Hermitage	St Petersburg
7	3,879	Amazons of the Avant-garde	Guggenheim Bilbao	Bilbao
12	3,697	Degas to Picasso	Guggenheim Bilbao	Bilbao
14	3,529	Andy Warhol: A Factory	Guggenheim Bilbao	Bilbao
15	3,442	The Art of the Motorcycle	Guggenheim Bilbao	Bilbao
20	3,241	The Tower Wounded by Lightning	Guggenheim Bilbao	Bilbao
21	3,212	Clemente	Guggenheim Bilbao	Bilbao
23	3,154	The Worlds of Nam June Paik	Guggenheim Museum	New York
27	3,055	David Salle	Guggenheim Bilbao	Bilbao

図表-3 Top exhibitions 2001

	一日当 入場者数	展覧会名	美術館名	開催都市名
1	8,033	Vermeer and the Delft school	Metropolitan Museum	New York
2	7,178	Jacqueline Kennedy:White House years	Metropolitan Museum	New York
3	4,924	The Medici and science	Galleria degli Uffizi	Florence
6	4,151	Frank Gehry. Architect	Guggenheim Museum	New York
7	4,062	Giorgio Armani	Guggenheim Museum	New York
14	3,503	Giorgio Armani	Guggenheim Bilbao	Bilbao
15	3,471	Van Gogh's postman	Museum of Modern Art	New York
16	3,421	Alchemy and entrancement	Columbus Museum Art	Columbus
17	3,395	The Worlds of Nam June Paik	Guggenheim Bilbao	Bilbao
18	3,372	The Global Guggenheim	Guggenheim Museum	New York
19	3,341	Troy: dream and reality Herzog	Anton Ulrich-Museum	Brunswick
20	3,294	Photon 999: Hiro Yamagata	Guggenheim Bilbao	Bilbao

出典) Guggenheim BILBAO, activity report 1997-2002

注) オリジナルのデータソースは、The Art Newspaper。グッゲンハイム美術館と関連性のある展覧会を中心にピックアップされている

④ コレクション

基本理念の一環として、ビルバオ・グッゲンハイム美術館は、グッゲンハイムのコレクションを補完し、幅広い範囲をカバーするために、独自のコレクションの構築にも着手している。

基本的な考え方は、新しいコレクションが明確な独自性を備え、首尾一貫したものにするため、美術作品の市場で、質の高い作品を発見し購入することである。新しいコレクションの中核は20世紀後半の近現代の作品。今後、技法や素材、スタイルに制限を設けず、開かれていてかつ統合された国際的な芸術作品のコレクションを構築する予定だとされている。

2000年に終了した第一期購入には、主に次の4分野が含まれている。

- ・重要な一点ものの作品
- ・数人のアーティストの作品から選ばれた重要な作品
- ・サイトスペシフィックなインスタレーション作品
- ・スペインとバスクの現存作家による現代美術

これまでの購入作品のリストには、ヨーゼフ・ヴォイス、ジャン・ミッシェル・バスキア、ルイズ・ブルジョア、エデュアルド・チリダ、フランチェスコ・クレメンテ、エンツォ・クッキ、ジム・ダイン、ジェニー・ホルツァー、アンゼルム・キーファー、イヴ・クライン、ウィリアム・デ・クーニング、ソル・ルイット、リチャード・セラ等々の名前が並んでいる。

⑤ 教育普及プログラム

ビルバオ・グッゲンハイム美術館は教育普及プログラムにも力を入れている。過去5年間に美術館では、45種類の教育普及プログラムを実施してきた。それは、学校の児童生徒から教師まで、ファミリー層から社会的に恵まれていない階層まで、そして高齢者から一般市民まで、を対象にしている。コレクションや企画展、美術館建築を活用したこれらの教育プログラムへの参加者は、これまでに延べ100万人近くに達した。各年の参加者数は下表のとおりである。

図表-4 教育普及プログラムの参加者数の推移

	1998	1999	2000	2001	2002	Total
School children	20,000	20,000	18,000	19,000	16,000	93,000
Educators	5,000	5,000	4,000	6,000	7,000	27,000
Families	6,500	3,000	25,500	35,000	37,000	107,000
General Public	108,000	100,000	190,000	180,000	120,000	698,000
TOTAL	139,500	128,000	237,500	240,000	180,000	925,000

出典) Guggenheim BILBAO, activity report 1997-2002

またこのプログラムでは、多言語の素材や解説を活用することによって、幅広い市民の関心に応えるようにしている。とりわけ、出前ワークショップや高学年向けのガイドツアー、Learning Through Art Program（アートをとおして国語や算数、社会など他の科目を学ぶプログラム）など、学校向けのプログラムは人気が高く、年々対象校が広がっている。生徒向けプログラムの参加者の25%はバスク州以外からの参加である。バスク州の学校の生徒の3人に一人は、これら教育プログラムの少なくともひとつには参加した経験がある。

その他にも、肉体的、精神的障害を持つ市民を対象にしたプログラム、例えば視覚障害者向けのプログラムや手話プログラムなど、にも取り組むほか、Learning Through Art Programなどでは、インターネットの活用など新しい技術を積極的に導入している。

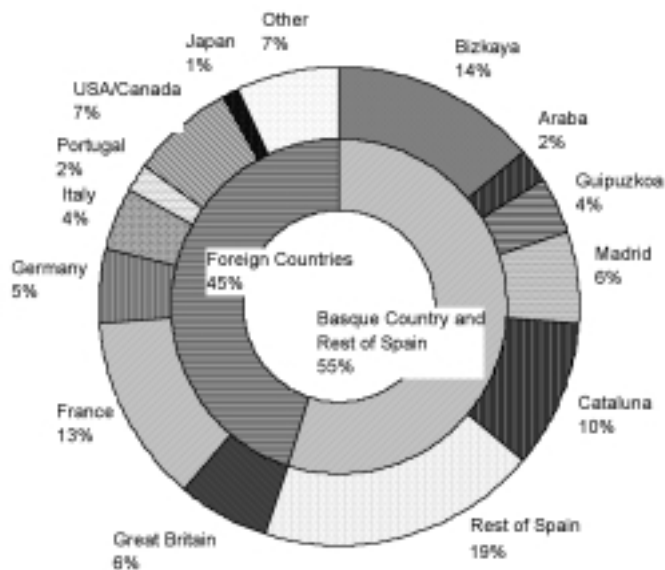
⑥ 入場者数

開館後5年間に、515万人以上の観客が美術館を訪れた。年平均100万人の勘定で、97-2000年の当初計画の年間50万人を大きく上回る結果となった。

入場者数に関して重要なのは、どの地域から観客が来ているかということであるが、この美術館は世界中から観客を集めている。この期間の入場者の45%は海外から、35%はスペインのバスク州以外の地域から訪れている。これは7人の内6人がバスク州以外からの観客であることを意味している。

バスク州とスペイン国内の観客の割合は、1998年には70%を超えていたが、2002年には40%強まで減少し、逆に、海外からの観客は30%弱から60%弱に急増している。とりわけ美術館の立地するビスカヤ県の入場者

図表-5 入場者の地域別割合



資料) Guggenheim Bilbao, activity report 1997-2002

の割合は、98年に30%程度を占めていたが、翌年以降10%前後に激減しており、この美術館が、いかに地域外からの観客を呼び寄せることによって、地域に経済的な恩恵をもたらしているかがわかる。

一日当たりの平均入場者数は3,100人で土曜の入場者が最も多い。10人のうち6人が午前中に入場。美術館の通常の開館時間は、午前10時から午後8時まで（月曜は休館）。ただし過去3年間、7月と8月は入場者増に対応するため、週7日、午前9時から午後9時まで開館されている。観客のほぼ60%は20歳～44歳で、男女比は人口全体の比率とほぼ同様である。

⑦ 観客サービスと満足度

美術展の理解を促進するために美術館は二つの基本的なサービスを用意している。ひとつは無料のガイドツアーで年間利用者は10万人、もうひとつがオーディオガイドで、こちらは入場者の約7%が利用している。

観客志向は美術館の活動を左右する重要な要因のひとつであるが、これまでに何度か観客の満足度調査が行われた。直近の調査は2000年で、それによると、市民の評価は極めて高く、全般的な評価では9点満点で7.71点、サービス全体の評価も高まりつつある。とりわけ、清潔さ（7.99）、チケットオフィスの従業員の対応（8.07）、チケットデスクでの情報提供（7.80）、ガイドツアー（8.16）などで、評価が高くなっている。

さらに、インタビュー調査の対象者から得られた回答によれば、98%が美術館への訪問を他の人に推薦し、80%が再来館したいと回答している。

⑧ 個人会員制度

個人会員制度は、1997年の開館の1ヶ月前に創設され、開館と同時に2,000名が加入。その年末には5,243人に達した。その後会員数は確実に増加して2002年には1万4,247人となり、個人会員の数では、スペイン国内の美術館で第一位、ヨーロッパ諸国の主要美術館の中でも、パリのルーブル美術館やロンドンのテートギャラリーに次ぐ位置を占めている。

退会者は少なく、85%という高い継続率を維持し、当初の計画の1万人を大きく上回っている。会員種別の内訳は図表6のとおり。

図表-6 個人会員の内訳

Categories	Members
Student/Senior citizen	4,605
Individual	4,263
Family	5,263
International	95
Honor Members	21
TOTAL	14,247

資料) Guggenheim Bilbao, activity report 1997-2002

⑨ 企業会員制度

現在の企業会員数は138社。会員企業には、社員証の提示によって入場料が無料になる他、企業名の掲示、美術館スペースの利用権（パーティなどのイベント開催が可能）、広報用の美術館のイメージの利用権などの特典が与えられている。

これらの会員企業の中には、特別展への協賛企業も含まれているが、種類別にみた企業会員数の推移は以下のとおりである。

図表-7 企業会員の推移

Members	1997	1998	1999	2000	2001	2002
Trustees	33	36	38	41	40	40
Benefactor Companies	6	12	12	15	17	17
Associate Members	22	57	83	89	83	81
TOTAL	61	105	133	145	140	138

資料) Guggenheim Bilbao, activity report 1997-2002

⑩ 海外における美術館の露出と経済価値

美術館が著名になるのに伴い、マスメディアへの露出に伴う経済的な価値が、毎年、計測されている。それは、スペイン、米国、フランス、ドイツ、イタリア、英国、ポルトガルの7ヶ国の新聞や雑誌への掲載記事のサンプル、そして周辺地域とスペインでのテレビやラジオ番組などに基づき、専門機関によって算出されたもので、開館後美術館を題材にしたニュースは、ほぼ1億1,500万ユーロの経済価値に達している。

さらに美術館は1997年以降、30件におよぶ各種の受賞を得ている。

図表-8 マスメディアにおける経済価値の推移（千ユーロ）

	1998	1999	2000	2001
International press	5,200	22,000	32,800	19,700
Radio/ TV	-	10,500	5,000	7,500

資料) Guggenheim Bilbao, activity report 1997-2002

⑪ 経済波及効果

ビルバオ・グッゲンハイム美術館の創設は、ビルバオという地域環境の中で文化的な基盤整備が都市開発と経済的な活性化の双方を達成する戦略になりうる、という考え方に基づいている。当初、その目標が達成されるかどうかについて、必ずしも皆が共有できるような根拠はなかったが、この美術館がそうした基本戦略の最初の一步となったことは間違いない。実際、コンサルタント会社の用意した経済モデルに

よって、美術館活動の経済的な波及効果が毎年計測されているが、そうした経済効果を生み出すことによつて、美術館は、バスク州の経済活動の強化に大きな役割を果たしてきた。

美術館の事業によつて1997年から2001年の間にもたらされた直接支出は、7億7,500万ユーロ以上に達しているが、それは美術館開設時の投資額の10倍にあたる。それらのうち、1億2,000万ドルはバスク州の財政への追加的な収入に該当する。つまり、州政府は3年間で投資額を回収したことを意味しており、このような公的な基盤整備としては極めて短期間での回収だったと言える。

1997年の開館から2001年の12月末日までの、グッゲンハイム・ビルバオ美術館の活動の波及効果は以下のとおりである。

図表-9 ビルバオ・グッゲンハイム美術館の経済波及効果（百万ユーロ）

	1997	1998	1999	2000	2001*	TOTAL
Direct expenses	40.5	190.4	202.8	192	150	775.7
GDP generation	31.5	148	168.3	157.5	150	655.3
Employment**	832	3,906	4,161	4,415	3,937	4,100
Treasury revenue	5.9	27.5	29.3	27.8	27	117.5

資料) Guggenheim Bilbao, activity report 1997-2002

注) ** 継続雇用の数字で新規雇用は含まない。合計は継続的な雇用の年間平均に基づく数字

* 2001年の波及効果は直接効果、間接効果に加え、誘発効果を含む（2000年までは含まず）

4. 都市再生プロジェクトの推進体制

第2節で、ビルバオ都市再生プロジェクトの全体像を整理したが、個々のプロジェクトの事業主体はまちまちで、関係者も大きく異なっている。このような大規模なプロジェクトを推進するためには、全体のグランドデザインを描き、プロジェクト相互間の調整を行った上で、さらに官民の共同体制を含め、総合的な推進体制を整備する必要がある。

ビルバオの都市再生プロジェクトの調査報告の最後に、そうした推進体制で中心的な役割を担った二つの組織、Bilbao Metropoli-30とBilbao RIA 2000の概要を整理しておきたい。

(1) ビルバオ・メトロポリ30 (Bilbao Metropoli-30)

① 設立と目的

ビルバオ・メトロポリ30 (以下「メトロポリ30」) は、ビルバオ大都市圏の再生と活性化に向けたプロジェクトの計画立案、調査、プロモーションを実施するために、1991年の5月に設立された協会組織である。同年6月にバスク政府によって「公共の利益を増進する組織 (Body of Public Utility)」として認定されるとともに、法律的にも財産権的にも100%の責任を持った組織として、同年12月にバスク政府の協会登録制度に登録されている。

この協会の目的は次の4つである。

- ・「ビルバオ大都市圏再生戦略プラン」の立案と実現を推進すること
- ・戦略プランによって、協会に委ねられたあらゆる種類の業務に責任を持つこと。とりわけビルバオ大都市圏の対外的、対内的なイメージの改善を図ること
- ・ビルバオ大都市圏、ならびに、有益なノウハウが得られる他の大都市に関する調査研究プロジェクトを実施すること
- ・ビルバオ大都市圏の関連する諸問題について、相互の利益に結びつくような共同解決策を見いだすために、公的機関と民間機関の間の協力関係を育成すること

② 組織構成

ビルバオ大都市圏で専門的な業務や事業を実施できる公的もしくは民間組織であれば、協会の会員 (設立会員、正会員、賛助会員) になることが可能で、次のような会員で構成されている。

- ・公的機関：バスク州、ビスカヤ県、ビルバオ市、他27市町村、バスク州市町村協会、ビルバオ港湾局、ビルバオ市・ビスカヤ県水道局、ビルバオ国際交易協会、ビルバオ地下鉄公社、SPRI、EUSKOTREN、MUNICIPALITY OF BALMASEDA PUBLIC BODIES
- ・民間企業：28社 (固有名詞記載のため業種は特定できないが、IBMのような国際企業の他、金融機関、

通信会社、コンサルタント会社と推定できる社名が含まれている)

- ・メディア：4社（新聞社等）
- ・大学：4大学（バスク州立大学など）
- ・研究所：3機関
- ・業界団体：22団体（ビルバオ商工会議所、建設業協会、旧市街地商店会、土木協会、工業技術協会、弁護士会、赤十字、建築協会、などの協会組織）
- ・準会員：32団体（BBVA財団、ビルバオ美術館、ビルバオ・グッゲンハイム美術館、欧州を中心にした23ヶ国の大使館、ユニセフバスク協会など）

③ 事業の構成と内容

メトロポリ30の具体的な活動内容は、大きく3つのプロセスによって構成されており、2002年にはそれぞれ下表に整理したような活動が行われている。なお、年間総事業費（支出ベース）は、2002年が約340万ユーロ、2001年が約160万ユーロである。

図表-10 メトロポリ30の事業の枠組みと内容

1	<p>協会の最も重要な機能は、再生プロジェクトを推進するために必要な知識やノウハウを見い出して応用すること (Search for Knowledge)</p> <hr/> <p>ビルバオ大都市圏の再生プロセスをモデル化すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビルバオ大都市圏の様々な事業主体やその関係を理解し、複雑なプロセスの運営方法に改善の余地がないかどうかを検討するのが目的。 ・具体的には、専門家を招いたセミナーや研修会が開かれている。 <p>高度な計画・運営手法の適用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・都市再生計画を分析し進捗状況を確認するために、年次事業報告書を作成して公開している。 ・官民のプロジェクト関係者間の戦略的な対話を促すため、開発シナリオの分析と見直しをおこなう。そのため、サンフランシスコに拠点のあるGlobal Business Networkのしくみを活用している。 <p>内外の研究機関との提携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビスカヤ県の都市計画局が地域計画を作成する際の事務局を担当（プロジェクトの研究と見直し、会議の招集と議事録作成、計画の広報と意見収集など） ・計画の実現に必要なノウハウや情報を得るために、内外の国際的な研究機関と共同でレクチャーやシンポジウムを開催。 <p>国際的な大都市に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビルバオ大都市圏の計画に参考になる他の大都市の研究を実施 ・2002年は、ルール地方（ドイツ）、リール地方（フランス）、オスロ（ノルウェー）、ロッテルダム（オランダ）、ニューキャッスル（イギリス）を調査。
2	<p>再生計画を推進するため、1で得られたノウハウを個々の革新的なプロジェクトに適用する (Generating innovation)</p> <hr/> <p>協会会員との情報交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ノウハウを具体化するには会員が、メトロポリ30の得たノウハウに基づいてプロジェクトを推進する必要があるため、様々な方法で情報提供と意見交換を行っている（年次レポート、月刊ニュースレター、ウェブ上での情報提供など） <p>広報委員会のサポート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2010アクセス・フォーラム（ビスカヤ県の道路計画の実態分析、評価がテーマ）を開催。 ・ビスカヤ県の経済開発局と共同で、6市町村の戦略構築を支援。

3	<p>ノウハウを適用したプロジェクトを具体化するため、会員および関係機関が再生計画の達成に全力を注ぐことを促進する (Obtaining commitment)</p> <hr/> <p>再生プロジェクトに社会的な価値を付与</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会員や関係者が全体的に前向きな印象を持って、各種の再生プロジェクトが経済的にも社会的にも利益をもたらすものであることを理解してもらうために様々な取り組みを展開。 ・そのため、国内外で様々なイベント、プロジェクトを実施(「ビルバオ・都市再生展」の開催 - 欧米6都市を巡回、ビルバオ空港の観光・経済情報サービスの拡充、シンポジウム「マイカーなしのビルバオ」の開催、チャールズ・ランドリーの講演会、ロッテルダムやドルトムントにおける関連シンポジウムへの出席とプレゼンテーションなど) ・海外からの視察団の受入(キプロス、メキシコ、仏国会議員、台北、名古屋など17件) <p>調整機能の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・都市再生プロジェクトを推進するため、関係者間の調整役としての役割を積極的に果たす
---	--

(2) ビルバオ・リア2000 (Bilbao Ria 2000)

① 設立と目的

一方、ビルバオ・リア2000(以下「リア2000」)は、1992年11月に設立された政府系の共同出資会社である。公共事業・経済省内とその関係機関(公共事業土地公社(SEPES)、ビルバオ港湾局、RENFE鉄道、FEVE鉄道⁴)からなる中央政府の行政機関、ならびにバスク州の行政機関(バスク州、ビスカヤ県、ビルバオ市、バラカルド市⁵)が、対等の立場で設立した。

つまりリア2000は、ビルバオを再生するための共同事業に関して、中央政府と地方政府の間の偉大な協調の成果だと言える。ビルバオ市は、1987年に最初の都市計画の基本施策を策定した。その施策には、市の開発にふさわしい地域として、国営企業の所有地であったアバンドイバラ(Abandoibarra)とアメツォーラ(Ametzola)が指定されていた。当時、市の事業の調整役だった公共事業・交通省(現在の国土開発省)の理事会が、ビルバオ大都市圏の再活性化を実現するために、国と地方が同等の立場で参画する組織体の設立を決定した。

リア2000の目的は、ビルバオ大都市圏の衰退にともない、荒廃した地域や工業地域を再生することである。その目的を達成するため、都市計画や交通、環境などに関する事業計画をコーディネートし、実行に移す。これらの事業はグローバルな視点からのアプローチによって、両方の行政組織から全面的な支援を得て実施されている。実際この組織は、行政機構の枠組みを超えた先駆的な企業体で、関係機関が全会一致で支援を決めたものを実施するという点が大きな特徴となっている。

② 財政構造、組織構成

リア2000は、3億ペセタ(約2.4億円、100ペセタ=79円)の資本金の供給によって設立された。そのため、組織は公的な補助金に頼る必要なく、合計600億ペセタ(474億円)にもほのぼろ様々なプロジェクトの経費を支出しても、今まで財政的なバランスを保ち続けることができた。それは、株主がビルバオ市とバラカルド市の中心部に所有する土地を提供し、市が土地の機能を再検討するというしくみである。この基本構

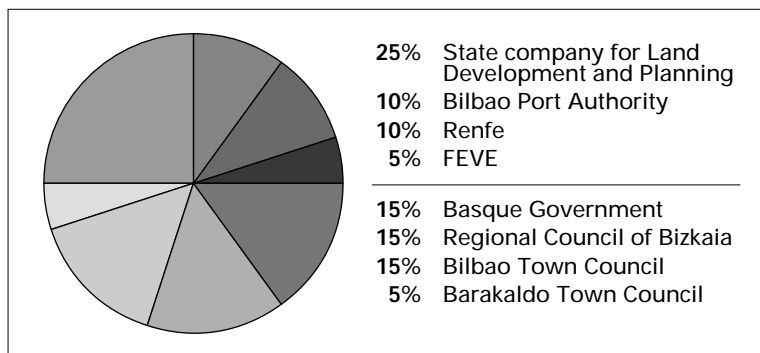
4 FEVEはゲージ幅の狭い鉄道という意味で、貨客、貨物の両方のサービスを行う狭軌(1m)の公共鉄道。RENFEがスペインの主要な鉄道網であるのに対して、RENFEはビルバオとFerrol、Leónの両都市を結ぶ二つの路線など、スペイン北部を中心にサービスを行っている。なお、RENFEは広軌鉄道のため、相互乗り入れができない。

5 Balakardo、ビルバオ市の北西(ネルビオン川の河口方向)に隣接する都市。

造に基づいて、リア2000が上記の土地の計画と開発に投資し、土地を民間デベロッパーに売却する。土地は中心街に立地しているため、大きな需要があり、売却によってキャピタルゲインが得られる。そのキャピタルゲインが、The southern suburban routingやBilbao La Vieja、Urban-Barakaldo programmeなど、市と周辺地域の重要なプロジェクトに順次投資される。その他の財源として、リア2000は、EUの補助金も活用している。

なお、役員会は20名で構成され、理事長はビルバオ市長、副理事長は開発省の都市基盤・交通大臣。株主の比率は下図の通りである。

図表-11 ビルバオ・リア2000の資本構成



出典) Bilbao Ria 2000ホームページから転載

注) 上段が中央政府関連組織 (RenfeとFEVEはともに鉄道会社) 下段がバスク州など地方行政組織

③ 事業内容

第2節で整理した、アバンドイバラ再開発事業が、リア2000の代表的なプロジェクトであるが、他にも以下のようなプロジェクトが進行中である。

- Ametzola : このプロジェクトも、都市再生の妨げとなっていた貨物鉄道用の11万m²以上のエリアを再開発した事業である。鉄道路線を覆うように整備された新しい地盤の上に、3万6,000m²の公園を中心とした居住地域が整備されている。これまでに750世帯が家を建て、さらに150件の保護住宅が計画されている。この開発によって鉄道はもはや地域を分断するような都市再生のバリアではなくなった。
- The southern suburban routing : これは、リア2000の鉄道基盤整備の中心的なもので、ビルバオの都市鉄道網を最大限に活用するため、ビルバオ市南部のRenfe鉄道とFEVE鉄道の路線を再編成するプロジェクトである。以前はこの二つの鉄道網によって市は大きく分断されていたが、この事業によって、川沿いのプロムナードが復活し、市の南部、東部への鉄道交通が整備された。
- Barakaldo : バラカルド市内の鉄工業に使われていた50万m²以上の土地 (ビスカヤ県の所有でリア2000に貸与) を再開発するプロジェクトで1998年にスタート。市の中心部の川沿いのエリアをウォーターフロントの都市空間に再生し、住宅やレジャー施設、オフィス、スポーツコンプレクスなどを建設する計

画。エリアの半分は緑地に提供され、道路の再整備によって高速道路網とこの地域を結ぶ交通基盤も改善される予定。

- Bilbao la Vieja : ビルバオの歴史的な地域を再生するプロジェクトで、物理的にも社会的にも衰退していた地域を、市の一部に復活させようというもの。事業費は1,800万ユーロで、アバンドイバラ開発計画によって得られた収入が財源となっている。
- Basurto-San Mamés-Olabeaga : ビスカヤ県、ビルバオ市、ならびにRenfe鉄道、FEVE鉄道と共同で進めるプロジェクトで、駅の撤去と新設、路線の移転などによって、東部地域からビルバオへのアクセスの改善が図られる。

これらの他にも、都市空間にパブリック・アートを設置するプロジェクトなども、リア2000によって実施されている。

5. ビルバオ都市再生プロジェクトに関する考察

調査で面会したメトロポリ30の事務局長Alfonso M. Cearra氏は、「あらゆるビジネスの源は都市にある」と断言する。グローバリゼーションによって国家の存在が小さくなり、都市のアイデンティティがより重要になってきたというのである。そして、都市の価値（value）こそが、その都市のインフラや工業製品よりも、重要な要素であり、ビルバオはグッゲンハイム美術館を誘致することによって、アートという国際的な共通言語で、都市の価値創造に成功した、というのが彼の解説であった。

確かに、ビルバオ・グッゲンハイム美術館の存在がなければ、ビルバオが衰退した工業・港湾都市から現在のように再生されたかどうかは疑問である。しかし、本報告書で整理したように、グッゲンハイム美術館は、ビルバオ都市再生プロジェクトのほんの一要素に過ぎない。

大規模な港湾の拡張計画が実現しなければ、都市の中心部にあった旧港湾設を移転することもできず、グッゲンハイム美術館を初めとした新しい都市施設の整備は不可能であった。また、都市再生事業の一環として、新空港や地下鉄網、高速道路網といった交通インフラの整備にも力が注がれている。港湾・工業都市として機能していた時代には、港湾設備さえ整っていれば、そうした交通基盤は必要なかったのかもしれないが、逆の見方をすれば、人口100万人規模の都市にしては、あまりにも都市基盤の整備が遅れていたという見方もできるだろう。そういう意味で、ビルバオの都市再生プロジェクトは、極めてオーソドックスな、あるいは古典的な都市基盤整備という側面も持っている。

さらに、ビルバオ再生の象徴となっているグッゲンハイム美術館は、ビルバオのオリジナルなものではなく、米国産の「価値」を移入したに過ぎない。彼らが整備したのは、2万4,000m²の美術館という「ハコ」のみで、運営ノウハウやほとんどの展覧会は、グッゲンハイム財団からの提供によるものである。つまり、コンテンツはビルバオ独自のものではない。そういう意味で、Cearra氏の言う、ビルバオが都市の新しい価値創造に成功した、という点は、厳密な意味では疑問を持たざるを得ない。

後述のナント市の場合は、市が独自に再生・開発したリュウ・ユニックという文化施設が、その象徴となっているし、ナント市を本拠地とするロワイアル・ドゥ・リュクスという劇団のオリジナルのアイデアに基づいて、テーマパークを開発しようとしている。つまり、ナント市の場合は、都市の文化的な価値を自ら創出しているが、ビルバオの都市再生プロジェクトはハード優先の開発と言わざるを得ない。そういう意味で、ナント市で創設されたフォル・ジョルネという音楽フェスティバルが、パッケージ化してビルバオ市に提供されているという事実は、両都市のクリエイティブ・シティへのアプローチの違いを象徴している。

しかしながら、そういう点を差し引いたとしても、ビルバオの都市再生の中核に国際的な美術館を誘致するという戦略を、バスク州やビルバオ市が決断したという点は、注目に値する。ビルバオをはじめ、グッゲンハイム美術館のグローバル戦略を推進してきた館長のトーマス・クレンズは、美術雑誌のインタビューの中で、グッゲンハイム美術館の建設が決まった時は、アートで都市が再生できる訳がないというのが、ビルバオ市民の一般的な反応だった、と語っている。しかし、美術館が実際にオープンし、年間100万人以上の観客が美術館を訪れ、観光客の増加によって市の経済が潤うようになって、市民もそれが起こりうることだということを理解するようになったという。

こうしたことから、バスク州やビルバオ市などの行政組織にとって、そのことが、いかに大きな冒険であったかは想像に難くない。そこには、強力なイニシアティブが働いたと思われるが、それを可能にしたのが、メトロポリ30に見られる官民の総合的な協力体制であり、中央政府と地方政府が共同で設立したリア2000である。そして、バスク州、ビスカヤ県が、税金の大部分の管理を認められるなど、スペイン国内で最も強い地方分権の権限を有する自治体であることも、そうした決断が可能となった要因のひとつであろう。

ビルバオは、大規模な都市基盤整備、都市再開発事業をベースに、グッゲンハイム美術館という象徴的なプロジェクトの成功によって、欧州におけるクリエイティブ・シティの代表的な成功事例となった。しかし、ビルバオが真の意味でクリエイティブ・シティとなるためには、現在進行中のハード中心の都市再生プロジェクトが完了した時点で、グッゲンハイム美術館という「輸入された価値」ではなく、ビルバオ独自の都市の価値を創造することができるかどうかにかかっているのではないだろうか。

参考文献：

- ・ TNプローブ、シンポジウム・シリーズ：現代都市ドキュメント、第2回「計画からマネジメントへ」（「1-（1）バスク州の地域計画」は、本書に掲載されたアルフォンソ・ベガラ（注）の講演記録『グローバル都市を目指して - スペイン・バスク州の都市地域多極システム』を参照にして整理した。）
- ・ （財）自治体国際化推進協会、スペインの地方自治、平成14年
- ・ Bizkaiko Foru Aldundia & Diputacion foral de Bizkaia, Bilbao the transformation of a city（「1-（2）都市再生プロジェクトによるバスク州の経済成長」、「1-（3）ビスカヤ県とビルバオ市の地域特性」、「2. 都市再生プロジェクトの全体像」は、主に本書を参照にして整理した。）
- ・ Guggenheim BILBAO, activity report 1997-2002（「3-（2）ビルバオ・グッゲンハイム美術館の概要」は、主に本書を参照にして整理した。）
- ・ Association for the Revitalization of Metropolitan Bilbao, Bilbao Metropoli-30、2002 annual report（「4-（1）ビルバオ・メトロポリ30」は、主に本書を参照にして整理した。）

参考インターネット情報：

- ・ <http://www.bilbao-city.net/english/index.asp>
- ・ <http://www.guggenheim-bilbao.es/ingles/home.htm>
- ・ http://www.bm30.es/Welcome_uk.html
- ・ <http://www.bilbaoria2000.com/>